

世間と人間凝視の眼

〈第一問答〉

研究主任 石川 教 張

わたしは、『立正安国論』の冒頭にしるされたことばを読むたびに、すさまじい社会の惨状とうめきにもひとしい民衆の嘆きを凝視した日蓮聖人の姿を想い浮かべる。

旅客来りて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、天変地天、飢饉疫癘、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩、既に大半に超え、之を悲しまざる族、敢て一人もなし。

然りと雖も、唯肝膽を摧くのみにて、弥よ飢疫逼る。乞客目に溢れ、死人眼に満てり。屍を臥して観と為し、尸を並べて橋となす。

この旅客のことばは、自然災害と飢饉疫病という人災とが連関してまきおこっている社会の現実を語ったものであり、

当時の人々が共通に抱いていた悲嘆のありさまをリアルにさし示したものである。

それは同時に、戦慄すべき世間の悲惨さと生死をひき裂かれた人間の語りえぬ愁苦を徹底して見つめつづけた日蓮聖人の眼に映じた惨苦の実態そのものでもあったにちがいない。

正嘉元年には、五月十八日、八月一日、八月二十三日にそれぞれ大地震がおこっている。特に、八月二十三日に突発した鎌倉大地震の模様については、『吾妻鏡』にも「廿三日、乙巳晴、戊尅大地震、音有り、神社仏閣一字として全きもの無し。山岳頽崩し、人屋顛倒し、築地皆悉く破損、所々地裂けて水涌き出で、中下馬橋の辺は地裂け破れて、其の中より、火炎燃え出で色青し」としるされている。

この翌年より大風、大飢饉、大疫病があいつぎ、それは年をおって増大していった。諸国の莊園は損亡し略奪が横行するとともに、飢えた人々が食をさがし求め、疫病によってバタバタと死に倒れてゆくこの世の地獄に人々はうちひしがれていたのである。正嘉元年から文応元年にいたる四年間は、こうした生活と生命の破滅的状况にみちていた時期であり、しかも、「飢疫逼る」という深刻な不安と危機になお包圍されている時代状況にあったのである。

鎌倉名越の草庵にいた日蓮聖人もまた、鎌倉大震災による被災者のひとりであり、うちつづく飢疫の体験者・目撃者でもあった。

「八月二十三日、戊尅の尅の大地震を見て之を勸ふ（安国論奥書）」「大地震を見て之を勸へ定めて書ける立正安国論」（顕立正意抄）とのべた日蓮聖人のことばは、『立正安国論』を勸文として書きしるした直接の動機が正嘉大地震の現場を見たという目撃体験にねざしていたことをもの語っている。

日蓮聖人がそこで見たものは、一字ものこさず倒壊した家屋であり生活の場を喪失した人々の群であつたらう。ルイと横たわり、倒れ伏し、あるいは山となって積まれ放置されたもの言わぬおびただしい屍であり、涙すら枯れはて

て、ただ食べものをさがし求めてさまよう人々の姿であり、骨と皮だけになって横臥する病人の苦闘にみちた顔であったであろう。

日蓮聖人は、それを遠くから眺めたのではなく、死の町と化した鎌倉の現場に身をおいて、その同一の場と時において、苦しみの実態とそのありようを見たのである。

しかも、日蓮聖人はこの現実をただ冷静に、他人事として見たわけではなかった。じぶんもまた、業苦の炎の燃えさかる中に立たずみ、苦闘するひとりとして衝撃的な惨状に驚がくし、悲嘆し、愁え、苦しみながら、それをおのれの心の痛みとして見つめたのである。

「余比等の災天に驚きて粗内典五千・外典三千等を引き見る」（下山御消息）。日蓮聖人は、先代に希なる天地の異変とそれによって現出した地獄の光景に驚き、無数の人間を死の深淵におとしこみ、悲嘆のどん底に投げこんだ社会苦と人間苦の現実の様相の凄絶さに驚がくしたのである。

このばあいの驚きとは、たんに前代未聞の出来事にぶつかったというだけにとどまるものではない。日蓮聖人が悲惨な社会のうちでしんぎんする苦しみと嘆きのすさまじい状況を、主体的に見つめ、とらえたところから発せられた同苦・同悲の叫びではなかったらうか。

なぜこのような災難がおこるのか、なぜ人々はこのような塗炭の苦しみにうめかねばならないのか、眼前の事実を衝撃的な事実として驚くことのできた姿勢こそ、このなぜという問いを問わねばならなかった動機であり、それが内典・外典によって解決してゆく学習実践の視角へとつながっていったのである。

どのような驚くべき事態が目の前につきつけられていようと、それを見ようとせず、知ろうとしない限り、その事実はないにひとしい。なぜと問わない限り、事実の実態と本質をとらえることはできない、まして、傍観的な姿勢から

では、悲嘆の中に身をおき、その悲しみをあのれの悲しみとし、苦しみを苦しみとしながら悲苦からの解放をめざす道をきり開くことはできないだろう。それは、自分を局外者において高みの見物をする態度やたんに上から眺めて同情する第三者風の態度ではなく、じぶんもまた苦しむ人間のひとりであり、無数の悲苦する人間をじぶんひとりの中にひきつける同悲の精神と同時代に生き苦しむものとしての深い愛なしには不可能であろう。

主人曰く、独り此の事を愁ひて、胸臆に憤排す、客来りて共に嘆く、屢談話を致さん、

日蓮聖人にとって、旅客の代弁する当時の人々の嘆きは、あのれの嘆きであつた「共に嘆く」日蓮聖人の姿がここにある。「独り此事を愁ひて」いた日蓮聖人は、他数の人々の苦悶からはなれたところで孤絶して愁えていたのではなく、あらゆる人々の苦悩をじぶん「独りの」愁苦としていたのである。苦悩にあえぎ、さ迷うばかりの人と人の間にあつて、苦しみの凄絶さを見つめ、見とどけ、苦からの救助を思いめぐらすただ「独り」のそれは自覚でもあつたであらう。しかも言おうとして筆舌に尽しがたい悲惨さに胸は張り裂けるばかりになりながら、災苦の実態とその解決を凝視したのである。日蓮聖人は、悲憤と同悲の思いを抱きながら、語らないではおれない「心情の哀惜」を、その奥底に涌きおこしていたのである。

日蓮聖人にとって、苦しみとは決して観念の世界の事からではなかつた。個人の心に明滅する悩みとか迷いとかがいつたものにとどまらなかつた。なによりも、じっさいに飢えのために死んでゆく人、疫病に倒れ臥す人、生と死を引き裂かれ悲しむ人、食を求めてさ迷う人の姿とその心こそ苦しみの現われ、実態そのものとしてとらえたのであつた。社会苦と人間苦は、時代の問題状況によってつきつけられるのであり、社会に生きる人間ありようによって悲苦はたちまち

のうちにあらゆる人間をまきこまないではおかないのである。

生と死との間をうめつくし、みちみちさせ、はびこっている生活と生命の社会的危機の現実、それが苦しみや悲しみのリアリティなのである。

こうした生死の奥底を凝視する日蓮聖人の眼からみれば、罪と苦悩を滅する利剣は、弥陀の名号といって善導の般舟讃を読み、専ら西方浄土の往生を願って弥陀の名をとなくて災難から救われようとするものは、生死の現実的苦から逃避するだけの厭世主義にすぎなかった。あるいは、衆病悉除を願って薬師如来の本願経を誦し、法華経薬王品の「病即消滅・不老不死」のことを崇め、「七難即滅・七福即生」を信じて仁王会を行い、真言秘密の教えによって息災の祈禱を修し、坐禅によって空と観じて苦からまぬがれようとしたり、鬼神の名を門にはって疫病を防ごうとし五大力士の絵を家ごとにかけて災難を防ぐやり方も天神地祇を拜んで疫病を払うことも、いずれもうわべの一時的・個人的な対策にすぎないものであった。また、幕府による徳政も、災難による社会状況を根本的に解決するものではなく、きわめて部分的で現実を糊塗する政策にほかならないものであった。病いからまぬがれる祈禱・行事ではなく、病いと死をもたらし、苦しみをうみだす社会の悲惨さをなくし、苦悩にあえぐ人間精神そのものを蘇生・覚醒させることでなければならなかった。

しかも、この社会と人間の悲惨さは、「世皆正に背き、人悉く悪に帰す」という精神の腐敗によっておこった正義なきゆえの悲惨さであり、真の仏と正法を失なった悲惨さにほかならなかったからである。善なるものと聖なるものに背いて、魔や悪鬼に精神を侵略された人心の悪魔化が、災難の実相なのであった。古代・中世の人々は、善神・聖人を崇め、魔や悪鬼を恐れ、それらを実在するものとみなしていた。その外在しているものを、日蓮聖人は正に背き悪に帰した人間の心に内在するものとしてとらえている。正は聖である。聖なる教えをあかした正義は、日蓮聖人においては釈迦

仏・法華經に帰すところにあつたが、これに対する魔と鬼神は人心を煩惱・疑惑・背信・偽善・邪惡におとし入れ人間を迷わせ苦悩の深淵にたたきこむものであり、人間の本心を狂わせ迷妄に追いやり、社会と人間の悲惨さを生みだすものであつたといえるだろう。正法守護の善神・聖人が国を去り、魔や鬼が来て災難をおこすという考えは、善神・聖人を護らない邪惡なものを治罰するという思想と表裏の關係にある。正法守護の善神・聖人に対する不信・不正直・背信・誹謗という人間精神の悪魔性が、社会と人間の悲惨さをうみ、ひろげ、悲苦を増大させるというのである。「信仰の寸心」を改めるといふ精神の变革なしに苦悩からの出離はありえず、それを一時的・個人的・内面的なものにとどめないで、社会ぜんたいに充滿する同一の苦を自らの痛みと受けとめ、災難の根源の究明と正に背く人間精神の蘇生をめざして立上つたのである。それを、世間と人間の闇をとりのぞく仏子としてのなすべき責務としたのである。魔王軍にたいする「賢聖軍」による正義の戦いの第一歩は、ここから展開されてゆく。

日蓮聖人は、世間と人間の罪性や魔性を、その根源にまで奥深くとらえ、へ仏に背く世間と人間の悲惨さ〽を凝視したのである。それは、「釈迦仏・法華經」による信仰の光明を暗闇に閉ざされた世間と人間の「闇」にそそぎ、不正背信の闇をうち破つて平安と至上の幸福と正法への帰依による覚醒をめざす立正安国の実践にむかう原動力ともなつたのである。

現代もまた、「正に背き悪に帰す」時代状況にある。背信誹法の闇深く末法濁乱の世はいっそう拡大され深刻化している。核戦争の脅威、自然の破壊、生命・生活・人権のじゅうりん、邪惡・不正・偽善・背信といった社会と人間精神の頹廢と罪性はいよいよ深まっている。人間はみな、よりどころを持っていない。本心を喪失し魔性におおわれている。魔性にたいする仏性開發、心田に仏種をさうえる道は、どのように開拓されねばならないのか。こうした「信」の立場にたつて、仏眼と日蓮聖人の眼がたえず見つめつづけたように、わたしたちにとって、何よりも社会と人間の闇の深部に

まで凝視し、その根源をきわめていく態度を持つことが不可欠だろう。社会苦と人間苦の実態として把握し、同苦同悲の一念を持続させて社会と人間の魔性と悲惨さをとり除き、邪悪背信と格闘する根本姿勢に立たねばならない。法華経の信にもとずき正義・正直・清浄の精神へと自らを正し、立邪亡国から立正安国への道を現代にきり開いてゆく習学研究と信仰実践を不断につみ重ねてゆかねばならないだろう。それは、「胸臆に憤排」し「共に嘆く」信仰的心情からはじまるのではなからうか。